□安藤敏夫，小笠原亮（監），森　弦一（編）：**日本花名鑑（1）2001－2002**　304 pp.　2001. アボック社．￥2,980.

市場に流通している植物のすべてを，整理して記録にとどめようという，壮大な試みである．まず高木・低木，コニファー，ヤシ・ソテツ，観葉植物，サボテン・多肉植物，つる植物，果樹，野菜，ハーブ，水生植物，シダ・コケ，球根植物，1・2・多年草と13区分したうえ，その中は学名の属の順に見出しがつけられ，その中は栽培植物の学名順に品種が並べられ，流通名などもできる限り記録されている．個々の植物については，性状，用途，流通時期，花期，適地，耐寒性など，盛り沢山の情報が多種多様なコードやマークで記述されている．さらに，農水省登録品種番号，日本花き取引コードを持つ品種はそれが付記され，将来は何か一貫した体系のコードで，全流通植物を整理把握する意図がうかがわれる．というのは，本書の目的の一つが，栽培植物の発注台帳としての利用にあるので，そのための整理コードが必要になると思われるからである．各地の園芸店，種苗店のリストもついている．産業のIT化に適応するために，そういうことは必要だし，そうなれば植物学的な分類体系との関係も，必然的に出てくるだろう．本書で扱われた植物は5000品種を超えるとのことで，一頁約20品種が掲載されていることになるが，各頁に最多14枚のカラー写真で，その頁内の主な品種の姿がわかるようにしてある．

わが国で流通する膨大な数の植物品種は，年々新しいものが出ては消えてゆく．著者らはこれを文化現象としてとらえ，その記録を残そうと意図している．江戸時代に発展したサクラソウやイワヒバやアサガオの多様な品種は，今では幻となってしまったものも多い．あとになって「あれは貴重だったのに」と悔やまないためには，今貴重であるかないかにかかわらず，記録したり保存したりしておかねばならない．本書はその一つの試みと位置づけられるだろう．

けれども市場の全品種をこのように整理するには，さまざまな困難や矛盾がある．ランは重要な花きであるが，本書では手をつけられなかった．その理由は，高度に複雑な交配が行われているため，学名の整理が困難だったためで，いずれは解決されねばならない．植物分類学の面から見れば，前記のような13区分のどれかにあてはめてからのリスト化では，見当がはずれることがある．たとえばイチゴが野菜でキイチゴは果樹とか，ブドウが果樹でアケビがつる植物とか，バナナが観葉植物などであるが，こういうことは流通市場の観点が優先する本書では，異とするに足りない．野菜や果物を本格的に扱うようになれば，もっと複雑になるだろう．図鑑的に見たければ，巻末の索引を利用すればよい．そこで図鑑としての利用面から見れば，以前の同社の「樹の本」シリーズにくらべて，カラー写真（28 mm角）の鮮明さがいま一息というところがもったいない．今後はそういう面での見直しも期待したい．

耐寒性については，世界共通の「ハーディネスゾーンナンバー」を用いている．これは主として最低気温から割り出した数値で，表紙裏に図示された色分け地図と各植物のゾーンナンバーを比べて，その地での露地栽培の可否を判断するものである．この地図は，野生生物の分布域の理解にも役立つだろうし，更に耐暑性や耐湿性についても同様な地図を作れる可能性がある．2号以下が引き続いて刊行されることを期待する．　　（金井弘夫）